

農林水産大臣賞（優秀賞）

水を想い、水を守る

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 二年 川原 もも香

私の家では、毎年、ゴールデンウィーク中に田植えをする。家族全員が大型連休となるこの大切な機会を活用して、「田植え」という共同作業を手早く、かつ愛情を込めて行う。この一大イベントは、肥料をまいて耕運機で土を耕し、あぜをきれいに整え、満を持しての作業となる。

例年通り、五月四日が田植え日と計画し、あらかじめ近所にも周知した。苗箱を運ぶ一輪車や田植え機が道路を走行することで周辺一帯が交通渋滞とならぬよう配慮するためだ。

そして、何よりも大切な「水」がきっちり自分たちの田んぼに利水され、水の量を調節できるよう綿密な計画を立てる。

今年もまた、田植えを行う前日に、田んぼへ水を引いてくる麻名用水に沿った道を歩いた。家族でウォーキングをしながら、近所の田植えの環境が整備されているか、用水に住む生き物のようすも観察しながら確認した。

今となつては見慣れた麻名用水だが、数年前まで、その流れを川だと思いついて疑わなかった。いつのことだったか、この川の名前は何なのかと母に訊ねると、それは麻名用水という飲料や防火、灌漑のために水を引いたりためたりする施設だと教えてくれた。私の住む地域は稲作に携わっている兼業農家の方が多く、我が家もその中の一軒である。そのため、この用水路には大変お世話になっているということも母は話していた。

一級河川である吉野川はとても澄んだ清流であり、それは地域人ならではの誇りだ。そして、吉野川と同じように、麻名用水から我が家の田へと引かれる水が辿る水路、そしてその水自体が、生活になくてはならない、私の大好きな「水」のひとつである。

また、水についての学習も、毎年の長期休みなどを利用して施設見学を続けている。例として、旧吉野川河口堰などのフィールドワークを通して、吉野川水系は家庭用水だけの役割を果たしているのではなく、工

業や農業用水としても重責を担う活用がされていると学べたことが挙げられる。河口堰の存在が計画的にわたしたちの暮らしに大きな役割を果たし、水の流れを調節してくれているからこそ、自分たちも「水」を当たり前前に利用できていることを実感する。

自らが田植えの手伝いをするという体験を通して、祖父母、また、曾祖父の先代人から「水とひととの関わり」を知る。潤沢な水は、非常に長い歴史の中で、たくさんの方の関わりを経て当たり前のように存在する。

蛇口をひねると出てくる水。外の景色に目をやってもあふれている水。それは、過去の人々が残した最大の財産であると私は考える。

だが、年明けの石川県で発生した能登半島地震で被害を受け、断水により不便な生活を余儀なくされた方々を目の当たりにすると、自分たちでつくる食料も、社会全体を取り巻く良質で安全な水があつてこそのものであると痛感している。

さて、いつもこの田植えシーズンには、水に対しての敬意が深まる。「おいしいお米を食べられて、健康に生きられているのは水のおかげだ」と。だが、本当は、いついかなるときもそうやって感じていなければいけないことも分かっている。世界中に水を求めてつらい思いをしている方がいて、その方たちのためにもわたしたちが小さなことから行動を起こしていかなければならない。

「水」は、食料となり、人の命綱へと姿を変える。「水」は、商品となり、お金へと姿を変える。「水」は大雨となり災害を引き起こす。「水」は、かたちを変化させ、わたしたちの生活を支えたり、まれに、脅かしたりする。そんな「水」と共存し、ここ徳島から、自らの住む地域の「水」を地域一体となつて守り、世界にも目を向けられる広い視野とあたたかい心を抱いた「徳島人」でありたい。